

国立歴史民俗博物館の愉悦⑦

赤阪御菌積翠池試楽図并記 一卷

文化2年（1805）

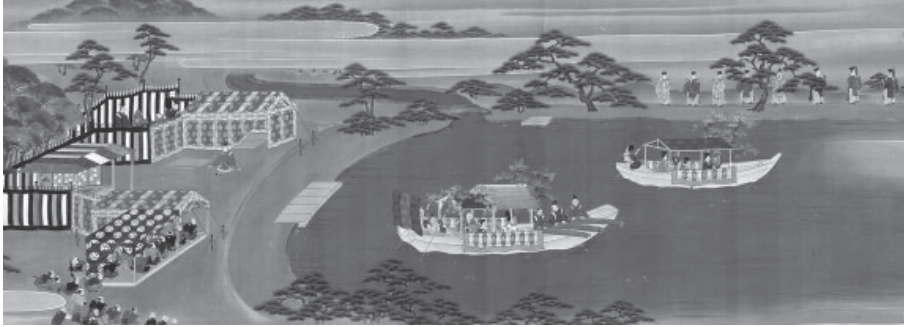


図1 赤阪御菌積翠池試楽図并記



図2 琵琶 銘「白鳳」(紀州徳川家伝来雅楽器)

古来、音楽は、文学や美術と同様に日本文化の中で重要な役割を演じ、貴族や武家の嗜みとされてきた。しかし、いにしえの人々が奏で楽しんだ実際の調べを、私たちが自らの耳で聞くすべはない。わずかに伝世する楽器や楽譜、楽書などを手がかりに、音楽をめぐる人々の営みや、それぞれの時代の音楽観を探るしかないのである。

紀州藩の第十代藩主徳川治宝（一七七一一一八五三）が、ほぼ一代で築きあげた壮大な楽器コレクションは、日本の音楽や楽器の展開の歴史、とくに江戸時代後期の音楽をめぐる文化と人的

ネットワークを知りうる格好の資料といえる。雅楽器を中心に、古今、国内外の楽器におよぶ古楽器コレクションは、現在では散逸して一部が所在不明ではあるが、その大半が国立歴史民俗博物館（以下歴博、一六二件・二三四点）、このほか国立劇場やその他の美術館の所蔵となっている。

ここに紹介するのは、その徳川治宝の雅楽実践の具体的なありさまを示す数少ない資料のひとつである。明治期まで南葵文庫の所蔵であった本図巻は、享和三年（一八〇三）十月初旬、江戸赤坂の紀州藩邸で、「中将の君」（水戸徳川家第六代治保（一七五一—一八〇五）か）を招いて催された管絃の「試楽」（予行演習）の様子を描いたものである。筆者は、幕府の御用絵師を務めた住吉広尚（一七八一一一八二八）で、国学者紀三冬（一七六九—一八二五）による跋文と奥書を伴う。奥書によれば、試楽の開催時に、紀州藩に仕えた儒学者、菊池衡岳が記録したものを、文化二年（一八〇五）、命により改めて書き写したものである。

常緑の松に紅葉が映える赤阪邸の庭園内、青い水を湛えた積翠池のほとりの芝生に色とりどりの軟障で囲った棧敷や楽屋、そして仮の御座が設けられ、広大な池では、幔幕と紅葉の大枝で飾られた二艘の舟を浮かべて、華やかな管絃の遊びが繰り広げられる。片方の舟の上では、琵琶・箏の弾きもの、もう片方の舟には三鼓（鞆鼓・太鼓・鉦鼓）の打ちものが、さらに岸辺においては、龍笛・箏・笙の吹きものが演奏される情景が、鮮やかな色彩を伴うやまと絵で詳細に表されている。

注目されるのは、行事の次第を記した跋文中に、歴博所蔵の琵琶「白鳳」を実際に演奏した経緯と、その音色に対する印象が記されていることである。治宝が収集した古楽器は、単なるモノとして集められたのではなく、生きた楽器として機能していた。そして、琵琶「白鳳」のように特別な名器としての扱いを受けた楽器は、本図に記録されたような重要な催しにおいて、度々演奏され、その音色を響かせていたのである。